

ずいひつ No.150

2021年5月25日発行

PRIDE AND
PREJUDICE

Jane Austen

愛知学院大学歯学・薬学図書館情報センター

Aichi Gakuin University

Dental and Pharmaceutical

Library and Information Center

大叔母が亡くなったと訃報を受けた。その前日、私は大叔母のことを想っていた。

いつも心を配っている親しい間柄ではなかった。最後に会ったのは4年前で、むしろそのとき以外の大叔母の記憶があるといえないほど。そんな私が彼女を想っていたのはたまたま目にしたネイルポリッシュの広告がきっかけだった。

まさか自分が生きている時代に、世界中を覆い尽くすパンデミックというものが起ころうとは思ってもいなかった。コロナ禍の日々は人それぞれであろうが30代非正規独身女性の日本人という負属性が並ぶ私にとっては、これまでの生活から楽しみだけがなくなり、どんな警戒レベルでも出勤するがお給料は減ったというものである。まず仕事があることの有難さを噛みしめつつもこの先の不安を直視せざるを得ないが、友人との会食、旅行、そしてライブ、これまでの生きる上で欠かせなかった鮮やかな休日失って、誰に見てもらうためでもないが気分を変えるために週末ごとに爪の色を塗り替えることがささやかな癒しとなっていた。だから私の覗くインターネットにはネイルの広告がまわりついている。そしてその日、インクボトルと羽ペンを模した美しいネイルポリッシュを目にした。そのままリンクを開き導かれた et seq. という台湾のデザイナーによるプロダクトサイトにしばし見惚れていた。文学をコンセプトにしたネイルポリッシュの世界であった。それはコンセプトやネーミングでときめいたものを集めてしまう私を大いに夢中にさせるもので、ひとつずつ見ていく中に見つけたのが、ジェーン・オースティンの『高慢と偏見』。そのとき、大叔母の記憶が舞い戻ったのだ。

4年前、母と大阪に行くことになり、ならば大叔母に会いたいと母が約束し会食することになった。大叔母は父方の祖母の妹で、すでに父も祖母も祖父も見送っていた私には縁遠かった。少々緊張しながら対面したが、大阪の人らしく快活な人柄でサプリやスクワットなどを欠かさずに過ごしていると、母よりもよっぽどエネルギーに溢れている。そんな大叔母は生涯未婚の女性だった。私が結婚しないという母の嘆きを愛読書の『高慢と偏見』を引用して逸らしてくれ、夢は舞台のイギリスに行くことだと瞳をキラキラさせた。丈夫だけど一人旅は不安があるから誰か連れて行ってくれたらと思ってる、あんた連れてって欲しくない？とまで。薄情な私はそのとき海外に行くなら友達の方がいいなと思いながら微笑みただけであったが、終わりの見えてこないコロナ禍の昼休みに開いた広告からそんな大叔母を思い出し、きっともうイギリスに行くことはできないと悲しんでいるかもしれないからこれを贈ったら喜んでくれるかなと思ったのだった。でも贈ることはできなかった。



et seq. JA1813 高慢と偏見 公式サイトより

家の前の生協の荷物がいつもすぐにしまわれるのに出たままになっていると近所の方が気づき救急車が助けに来てくれたとき大叔母はお風呂場で倒れていたが大きな声で会話できていたという。けれど救急車は何時間も動くことはできなかった。2021年の4月末の大阪だった。先日の電話では元気だったのにと突然の別れを悲しむ母、ご近所付き合い、弔う親戚、孤独じゃなくてよかったと安堵したけれど悲しみはなかった。私は縁を繋ごうとしてこなかった。薦められた『高慢と偏見』も読んでいなかった。あのときどんな台詞を引用して何を語ってくれたのかすらよく覚えていない。でも見つけたポリッシュを贈ってあげたかった。これを見て貴方のことを思い出しました お元気で過ごしてですか と、指先が色づくだけでちょっと幸せになれると思っている私だからこそその思いがけないプレゼント。きっと瞳をキラキラさせた大叔母が浮かんでしまう。できたのにできなかったやるせなさが夜中に布団にもぐった頃には悲しみとなって私は少し泣いた。でも、本当に贈っただろうか。とりあえず5月はいろいろと入用だからと、あのときそのままサイトを閉じてしまっていたのに。もう今は、いつか、でいてはいけない時代なのだ。そう薄情な自分に言い聞かせて目を閉じた。

どこにも行けないGWはVODでBBC制作の『高慢と偏見』のドラマを見て、関連作と表示された『ジェーン・オースティンの読書会』という映画も見た。「オースティンは、人生の最高の解毒剤」と考える離婚歴6回の女性バーナデットが傷心の友人や知り合ったばかりのメンバーを含む6人でオースティンの全著6作をひと月に1冊ずつ語り合う読書会を開くという大人のヒューマンドラマだ。著作を読んでいなくても面白かったがそれぞれの考察はわかっていた方が絶対に面白いことはわかる。ハッピーエンドすぎるハッピーエンドを迎える物語だったけど、今は眩しく見えるばかりの着飾って集まるパーティー会場のラストシーンに大叔母も笑顔で混ざっていたりしてね、と想像して心地よく決心した。私も半年かけてオースティンを読もう。いつかじゃなくて、今から。